

E-mailとテレビ会議システムを利用した 長期英語圏留学における生活及び学習支援授業の実践 A Study on Courses Aiming at Enhancing Students' Activities, Studies, and Research Overseas by Means of E-mail and Online Virtual Classroom

飯田 毅

同志社女子大学学芸学部国際教養学科

Abstract: One of the issues of study abroad programs in universities is how faculties help students overseas overcome the stress caused by different cultures and achieve their goals. This is a study to clarify how university teachers and staff in one department cooperate to assist students overseas in controlling and developing themselves. The students of this department have to study abroad in an English-speaking university for two semesters to improve their English skills, take academic courses overseas, and conduct their own research. Through required courses named Tutorial I & II, four teachers contact their students overseas by means of E-mail and online virtual classroom. The students have to submit two kinds of report each month during their study abroad: one about their research to their supervisor and the other about their daily life to the staff. At an interim meeting students staying in different countries present their research using an online virtual classroom, asking and answering questions about the presentations. Because of these courses, almost all students are able to lead a satisfactory life overseas, improve their English skills, and take academic credits overseas. Finally, they successfully submit their own reports on research during their study abroad to their supervisor at the end of the course.

Keywords: study abroad, E-mail, online virtual classroom, research

1. 留学派遣の問題と支援の基本

近年、経済のグローバル化の影響を受け、大学においてもグローバル人材育成教育が盛んになって来ている。本学の三つの教育理念の一つが「国際主義」である。その「国際主義」を充実させるため、2007年学芸学部国際教養学科が設立された。本学科の最大の特徴は4年間のカリキュラムの中に1年間の留学が義務づけられている点にある。本学科の学生はアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの英語圏5ヶ国28の大学に約1年間留学をしなければならない。

本学には国際教養学科の創設以前から協定

留学という制度がある。現在でも全学で毎年10数名の成績優秀な学生を海外の協定大学へ1年間派遣している。国際教養学科設立の際、カリキュラム等を議論する設置準備委員会の中で三つの懸念される問題点が出された。①協定留学で毎年10数名の学生しか派遣していないのに、定員80名の学生全員を留学させて、果たして何人の学生が留学先の大学で正規科目の単位を取得できるだろうか。②協定留学とは異なり、国際教養学科の留学制度では必ずしも選ばれた学生が留学するわけではない。留学中、学生は安全に生活し、異文化の中で生じるさまざまな問題に対応できるだろうか。③協定留学による学生の英語力の伸長を示すデータがない。国際教養学科の留学によって、どの程度英語力が伸びるだろうか。

Tsuyoshi Iida
Doshisha Women's College of Liberal Arts
E-mail: tiida@dwc.doshisha.ac.jp

(受付：2014年10月4日、 受理：2014年10月28日)

上記の懸念される問題に対して以下3点の改善策が考えられた。①留学前の英語教育と異文化理解教育を充実させる。②留学前後の英語テストや学生の活動に関する質的、量的データを記録し、保存する。③留学中は必修科目である「Tutorial／実地研究指導I・II」（それぞれ4単位，合計8単位，以下「Tutorial I・II」）という科目を設ける。この科目は当初，留学中の単位を取得できなかった場合の安全策として考えられた。しかし，実際に授業を行ってみると，この科目を通して，留学中の生活面や学習面の支援ができることが分かった。現在の本科目の目標は「留学先での学習を充実したものとし，個別研究を発展させる」ことにある。特に，留学中の支援をICTの利点を最大限に利用することに特徴がある。E-mailとテレビ会議システムを効果的に使って，学生が留学中，安全に生活し，意欲的に学習に取り組み，自律して各自の研究課題である個別研究に取り組める環境作りを目標としている。現在，本科目は4人の専任教員が職員の協力を得て，共通シラバス，同一評価基準で実施している。担当者間で支援の偏りが無いように，精神的な問題等を持つ学生を考慮しながら，1クラス20人前後のクラスを編成している。本稿では，その取組を一担当教員の実践を通して考察する。

2. 留学支援体制と支援方針

学生が安全に留学するためには学内における危機管理体制を明確にした上で学科内の留学支援体制を構築しなければならない。本学は留学中の24時間の安全確保のために危機管理会社と契約している。また，本学科の留学支援は全学組織の国際交流センターの協力を得て実施している。国際交流センターが海

外の大学との協定締結及び危機管理会社との窓口としての役割を持つものに対して，本学科では学生一人ひとりに対する留学支援を担当する。

図1は本学科の組織図と同時に留学支援体制を示している。図1からわかるように留学支援は学科主任を中心として専任教員，専任事務職員，留学支援担当事務職員が中心になり，お互い協力し合って学生を支援している。

本学科には帰国子女，高校時代に留学経験のある学生，一度も海外に行ったことがない学生等さまざまな経歴を持った学生が入学する。このような多様な経歴を持つ学生に対して教職員の一方的な支援は学生の成長を妨げる。本学科の支援の基本方針は，留学によって学生一人ひとりが人間的に成長できるようにすることであり，自律した学習者を育成することにある。その方針を示す一例として，本学科入学の際のオリエンテーション時期に学生に対して以下のことを指導する。「わからないことをそのまま質問するのではなく，一度自分の頭で考えた上で質問しなさい」。このような指導を日頃から行うことで，学生は直面する問題を他者に頼るのではなく，自分で捉えるようになり，海外で遭遇するさまざまな問題に対しても自分で解決できるきっかけとなる。

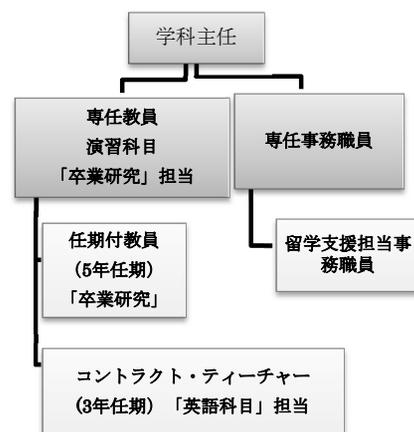


図1 学科組織図及び留学支援体制

3. 留学派遣生への支援

(1) 留学前の支援

図2は本学科のカリキュラムの概念図を示している。本学科の演習科目は1年次春・秋学期に「国際教養演習I・II」、2年次春学期に「国際教養演習III」があり、その内容は初年次教育から本学科における研究分野及びその方法について知ること目標がある。いずれも学科同一シラバスで、共通の評価基準で授業が行われている。

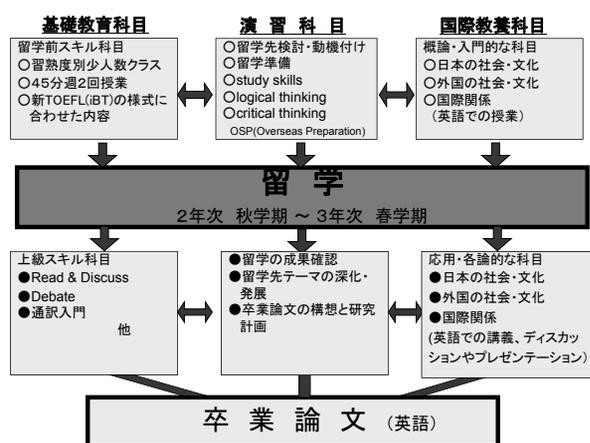


図2 本学科のカリキュラムの概念図

留学前の2年次春学期科目である「国際教養演習III」の授業目標は、①留学中の研究テーマ決定、②学術的なテーマに関して日本語と英語でディスカッションができる、③基礎的な研究方法を学ぶ、という3点である。この授業で扱う地域研究、言語研究、異文化研究や他の科目を通して、学生はそれぞれ留学前に留学中の研究テーマを決める。次に、そのテーマについて留学直前の7月末にポスターセッションを実施し、全員が20分の制限時間の中で研究の概略を発表する。その発表に1年次生、4年次生、学科の全教員が参加し、質疑応答を行い、発表に関するまとめのレポートを書いた上で留学に出発する。2012年度に筆者が担当した学生は20名であった。代表的な研究テーマとして四つ取り上

げてみる。

- ① Canadian cultures from movies
- ② Indigenous languages and cultures in Winnipeg
- ③ Rock music and social class in the UK
- ④ Women's career in the USA

いずれも学生自身が留学前に受けた授業が契機となり、興味を持ち、下調べをした上で各自の研究テーマとしている。

(2) ICTを使った留学中の支援

学生の研究テーマは留学中の本学の科目である「Tutorial I・II」を通して究明される。図2のカリキュラムの概念図にもあるように、この科目は演習科目に分類され、留学中の唯一の本学科科目であり、卒業研究に至る重要な科目である。

留学中、学生は留学先大学での学習に取り組みながら、それぞれの研究テーマに関するまとめを毎月末にE-mailの添付ファイルで提出する。本学科の学生は多様な英語力を持って入学し、留学前の基礎教育科目である英語集中プログラムで英語力を伸ばす。しかし、すべての学生が留学直後に留学先大学の正規科目を受講できるわけではない。現在、90%の学生は留学直後、留学先大学に併設されたEnglish as a Second Language (ESL)と言われる英語コースを修了してから正規科目を受講する。したがって、多くの学生は英語コースの授業を受けながら、各自の研究テーマについて研究する。一方、最初から正規科目を受講する学生は正規科目を受講しながら、各自の研究テーマについて研究を進める。学生は月末に各自の研究テーマに関して研究したことを専用の用紙に英語なら300 words、日本語なら800文字程度にまとめ、各担当教員に研

究レポートとして提出する。担当教員はそれを読み、学生一人ひとりにコメントを加えて、返却する。

学習面に加えて、生活面（健康・安全面）に関するレポート（A4用紙1枚）同様に毎月末に学科事務室にE-mailの添付ファイルで提出する。その内容は、最初に当該月全体の生活全般について学生が簡単にまとめた後に、住居、大学、街、交通、クラス、学習、支援、健康、人間関係、文化適応、経費、コミュニケーション、生活満足度という13の項目に関して、3段階（A：良い、B：普通、C：良くない）で各自が評価する。ただし、Cの評価をつけた場合には、学生は具体的にその理由を書かなければならない。事務室に提出されたレポートは事務職員が一枚一枚チェックする。また、特にCをつけた学生に対しては気をつけると同時に、必要があれば担当教員に連絡を取り、E-mailやテレビ会議システムを使って学生と話し合う。また、毎月の学科会議に前月の留学の生活状況をまとめ、Cと評価された項目については学生が書いたまま掲載し、学科会議で報告する。事務職員が読んだレポートは担当教員ごとに分けられ、手渡される。このようにして、最終的には担当教員は研究テーマと生活面の両方のレポートに目を通すことになる。

留学中の学生の様子は生活面のレポートだけでなく、添付で研究レポートを送る際の学生の何気ないE-mailの文面からも把握できる。また、学生によっては、留学先の大学の科目履修についての質問やESLを修了するためにどうしたら英語力を身に付けられるのかを尋ねてくる場合もある。場合によっては、異文化摩擦から生じるトラブルにも対処しなければならない。そのような事態に適切にア

ドバイスすると同時に、事務職員と連絡を取り合いながら、すばやく対処することが大切である。そのため、専任教員と専任事務職員との間はメーリングリストで連絡を取り合い、情報をすばやく共有できるようにしている。

各担当教員は留学中の学生の支援に関してきめ細かく対応している。一例として、2年次春学期の最後の週に各教員はすべての担当学生と一人30分を使って面談をする。この面談は「Overseas Preparations/留学事前指導III」の指導計画に含まれたものであり、留学前の学生の健康状態や渡航方法を把握し、留学中の毎月の報告書の書き方を指導し、最終的に充実した留学にするために実施するものである。その際、筆者はクラス全員に共通の内容を含んだ研究レポート作成計画書を手渡している。学生の留学期間は国や大学の学期により異なる。表1はカナダに留学した学生の2年次9月から3年次8月までのレポート作成計画書である。研究の流れは、基礎研究から研究方法確立、データ収集と分析、まとめという順に進む。また、現地での学習の様子を毎月報告させている。

表1 研究レポート作成計画書

月	レポートの内容
9	研究の見通し（〇月までにどのように進めるか）
10	基礎研究（テーマに関連した文献等を読む）
11	基礎研究（テーマに関連した文献等を読む）
12	基礎研究（テーマに関連した文献等を読む）
1	研究方法の確立と資料、データ収集方法（案）
2	現地での学習の様子。データ収集。
3	中間発表（Adobe Connectを使用し発表し合う）
4	レポート作成1（全体の概要を提示）
5	レポート作成2（chapter毎に100 wordsにまとめる）
6	レポート作成3（chapter毎に200 wordsにまとめる）
7	6月のレポートを修正し、完成版を仕上げる。
8	研究の概要を完成させる（今後の研究の方向性、卒業研究との関連）

留学中の科目である「Tutorial I」は留学出発直後から翌年3月までであり、3月にはテレビ会議システム（Adobe Connect）を使って、中間発表会を実施する。テーマに変化を持たせるためにそれぞれ異なる留学先の学生3人から4人で任意のグループを作らせ、各自の研究課題について英語でPowerPointの資料を作らせ、質疑応答を含めて一人20分間で英語を使って発表させる。教員は学生同士の質疑応答が円滑に行われるように支援する。Adobe Connectはインターネット回線を使ったテレビ会議システムである。参加者の顔をモニター画面で見ながら提示された資料を読み議論していると、時空を超越し、あたかも同じ教室で授業に臨んでいるような気分になる。Adobe Connectを使った中間発表会は、6ヶ月前ポスターセッションでお互い発表し合った学生同士がそれぞれの留学先で研究の進捗状況を確認する機会でもある。久しぶりに会った友人と懐かしい気持ちを共有すると同時に、それぞれの進み具合に刺激を受ける機会でもある。このようにして、E-mailやAdobe Connectを使って中間発表を行うことでそれぞれの研究内容を深めることができる。

（3）留学後半及び留学後の支援

「Tutorial II」の範囲は4月から10月末の「研究報告書」提出までである。学生はそれぞれの留学が終了する月まで毎月レポートを提出し続ける。表1から分かるように、筆者の場合は、「Tutorial II」では研究報告書の完成を目指して、毎月それぞれのChapter毎に決められた語数でまとめるようにしている。

帰国は留学先の大学によって異なり、早い学生は6月帰国、遅い学生は8月帰国となり、

遅くとも8月31日には全員が帰国する。帰国後、10月の土曜日の半日を使って留学報告会を実施している。本学科の1年次生と4年次生及び父母に対して研究内容を含めた留学中の体験をポスターセッションの形で実施する。最終的に生活面全般にわたる自己評価を含めた「留学報告書」と研究のまとめである「研究報告書」（英語で本文約1,500 wordsでまとめたもの）を提出する。

以上、留学前後では、実際に顔を突き合わせて各自の研究テーマや体験について語り合い、留学中はメディアを通して各自の研究テーマについてやり取りをすることで研究を深めると同時に、留学中の安全を確保し、異文化摩擦によるトラブルを克服し、学習や研究に取り組める環境作りにも配慮している。この科目は留学後3年次の「卒業研究I」、4年次の「卒業研究II・III」につながり、最終的には各自英語で卒業論文をまとめることになる。言い換えれば、留学中の研究は卒業研究の前段階としても位置づけられている。

4. 留学支援の考察と課題

留学中の本実践による成果及び改善に関して、学生の英語力、学習面、生活面、そして今後の課題の4点から振り返る。次ページの表2は2011年度入学生82名の留学前後のTOEIC総合点の変化を示している。2009年度入学生からTOEICを使って留学前後の英語力を測定することにした。その結果、当初留学前の学年平均が580点前後であるのに対し、留学後は約750点となり、英語力の向上が見られた。また、この平均値は年々向上し、2011年度入学生の成果は留学前の学年平均が596.6点、留学後が783.2点であった。TOEICが主に日常のコミュニケーション能力

を評価しているのに対してTOEFLは学術的な英語力を示している。表3は2011年度入学生24名のTOEFL iBTの総合点の変化を示している。学術的な英語力に関しても向上が読み取れる。興味深い点は、いずれのテストも留学によって「標準偏差 (SD)」が小さくなっていることである。すなわち、留学によって学生間の英語力のばらつきが小さくなったことを示している。TOEICやTOEFLの点数向上は留学生への学科の支援と留学先での勉学の総合的な結果である。

表2 2011年度入学生TOEIC総合点

	Mean	SD	MAX	MIN
留学前	596.6	111.4	885	330
留学後	783.3	90.0	985	555

表3 2011年度入学生TOEFL iBT総合点

	Mean	SD	MAX	MIN
留学前	57.9	10.8	83	33
留学後	67.7	10.7	95	49

留学先大学における正規科目履修者の割合は毎年全体の約80%以上に達し、一人の平均修得単位数が18単位であった。すべての学生が正規科目を修得できたわけではなく、ESL段階で終了してしまった学生は例年20%程度いる。今後更に留学前の指導の充実に配慮する必要がある。また、E-mailを通して教員の側から積極的に留学中の英語学習についてアドバイスすることも必要になるであろう。

毎月のE-mailを通じたレポート提出は学生の生活面の様子を把握し、個々の学生の問題点を教員と事務職員で共有するのに役立っている。E-mailを使った伝達で大切なことは、

実際の伝達以上に相互にやり取りの確認が求められるということである。教員側が送ったコメントに学生ができるだけ早く感想を送る、コメントに対して質問をする、学生の何気ないメールの文面から心情を読み取るというような相互の密なやり取りが重要である。また、テレビ会議システムを使った中間発表は学生同士のやる気を刺激するという点で効果がある。試行錯誤を繰り返す中で学生の毎月のレポートと中間発表の内容が充実し、それが卒業研究の質の高さの一つの要因となっている。

幸い本留学において多少のトラブルはあるが、現在まで学生は比較的安全な留学生活を送っている。これは教員と職員が協働で留学前を含めて留学中の学生の支援に当たっているためであり、学生の細かな情報を両方で共有しているためである。この支援体制は学科全体の満足度にも影響し、毎年本学の教育・研究推進センターが実施している全学アンケートでは、満足度が90%以上に達し、11学科の中で最も割合が高い。また、学生の留学プログラムに関する満足度は100%近くに達し、学生の信頼度が非常に高い。

残された課題の一つとして、なかなか自律できない学生に対する指導方法が挙げられる。学生によっては計画的な研究計画が実行できない学生も少なからずいる。そのような学生のためにも、今後全学生に対して研究入門等の手引書作り等をしながら、留学前及び留学中の指導改善を図っていきたい。

本研究は科学研究費基盤(C)(課題番号23520773)の助成を受けたものである。